

主 淨

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別換承認雜誌第五二五二号
昭和三十三年一月二十五日印刷 昭和三十三年二月一日發行

第二十四卷

第二号

二月号



浄土寺院必読の書増版

仏教大学教授 坪井俊映 著

浄土三部経概説全

A5上質紙・特製本
三段組・六三五頁
定価一、二〇〇円

初版たちまち売切れ！

仏書のベストセラーはこれだ！

浄土三部経を最も判り易く解

説した本書を ぜひ

毎日新聞評

この経典は浄土門の拠所となるもの。浄土宗義を明らかにする目的で綿密に注釈、解説が行われている。

常盤大定監修

仏典説話全集全十二巻

B6各四三〇頁余 総ルビ
各巻 四〇〇円
三、六〇〇円
(送料共)

御希望に依り第三巻及第七巻増刷して全十二巻を揃えましたからお申込下さい。なお分冊売りはしません。

高橋良和著

影絵 法然さま 価九〇円
物語 法然さま 一六六円

法然上人の御一代記を美しい影絵によって物語る二色刷の影絵絵本

話 児童 幼

日本図書館協会選定図書
高橋良和・小関尚之・山田巖雄他著

星の花

価一八〇円
二四四円
すぐその儘お話に使えるお話の台本

発行所

隆文館

浄土 二月号 目次

表紙・扉絵……………結城天童

随筆 供養の文字……………中村素堂……………(14)

法然上人と念仏……………竹中信常……………(2)

列車の中で……………村田嘉久子……………(20)

涅槃 怠らず精進を……………宮林昭彦……………(10)

会 消えざる灯…………………………(11)

蘇峰翁の戒名のこと……………佐藤賢順……………(24)

哲学の小路をゆく……………石上善応……………(28)

実話 医者合掌…………………………(31)

話 禍を呼ぶ女…………………………(33)

信仰 相談……………佐藤賢順……………(18)

歌 壇……………岩野喜久代……………(17)

書 評……………須藤隆仙……………(23)

生命の起源……………(9) 扉の御法語……………(24)

印度の古いクイズ……………(26) ひとのぼた餅……………(16)

仏教ものしり帖……………(17) 善いくせをつける……………(27)

聖典 万人に真実を……………佐藤密雄……………(36)

浄土

二月号

上品^{じやうはん}をねがふ事は、わが身
のためにはあらず。かのくに
にむまれをはりて、かへりて
とく衆生^{しゆじやう}を化せんがためなり。
これあにほとけの御意^{おんごころ}にかな
はざらんや。

法然上人御法語





法然上人と念佛

竹 中 信 常

一、日本の仏教とした宗祖上人

仏教は、私共日本人の生活と思想にとって、切っても切れない関係にあります。御承知のとおり、仏教はインドにおこった宗教ですが、今から千数百年前、日本に伝えられたものです。大体、思想とか、信仰とかというのは、時代や民族によって色々に変るものですが、仏教信仰も、はじめは、一般の人人にはなじみのない、いわば舶来物、輸入品といった感じで、いづれかという、むづかしい経文や、おごそかな儀式、壮大な伽藍といった印象が強かったようであります。当時の貴族や学者達は、丁度、今日、私共が英語を勉強したり、西洋の学問を学んだりするように、漢文、つまり当時の中国語を学んだり、また、政府の公式の文書や、日記などは漢文で書かれたりしまして、中国文化を通じて、仏教の思想や信仰を受けいていたのであります。

こうして、仏教が日本に輸入されたにしましても、そのままの形では、いつまでたっても、輸入品であり、舶来品であったでしょうが、これを思い切って、改造して、日本人の思想に、ぴったりと当てはまるように作りなおした人が、法然上人だったのです。私は、法然上人のことを考えるたびに、西洋で、キリスト教を、古い、いかめしい形のカトリックから、新しい、どんな人にもなじめる形のプロテスタントに作りかえた、ドイツの宗教改革者、マルチン・ルーテルのことを思いうかべるのです。ルーテルが、キリスト教を、王様とか貴族とか金持階級とかといった、特権階級の人々の手からときはなして、百姓や町人達のためのものとしたのと同じく、法然上人も、それまでは、叡山や高野山のような山の上にあって、一般庶民の生活とかけはなれた、むづかしいことばかりをいつていた、山門仏教を、山からおろして、京都の町中で、その日ぐらしの貧しい人々にとりかこまれながら、仏教の教えを、かみくだ

いて、やさしく、誰でもが信じ、おこなえる形にして与えて下さったのであります。仏教をいきかえらせ、日本人に本当の仏教を与えたもの、いいかえますならば、日本独特の仏教を作り上げた方こそ、法然上人だと申せます。

もちろん、法然上人のほかにも、えらい坊さんは沢山おいでになりました。そして、それぞれ、立派な宗派を立てられて、多かれ少なかれ、日本の精神文化に貢献しておられます。しかし、法然上人ほど徹底的に、根底的に、仏教を建てなおした方は、後にも先にもなかったといえます。

それでは、法然上人はどのようなにして、仏教を日本にいきかえらせ、日本独特の信仰を確立されたのでしょうか。

私は、今、法然上人は、他の多くの祖師方とはちがって、仏教を根底からみなおし、つくりなおしたと申しました。それは、一体、どんな意味なのか。一口に申しますならば、今までの仏教は、すべて、りくつの仏教である。従って、それは学問ではあっても、人間の魂を救うことは出来ない。悩める者の心に落ちつきを与え、迷える者に確信を与え、真に人の心を救いに導くのは、りくつではなく、「信ずる」ということであります。弥陀の本願を信じて、一心に念仏を唱えることのほかにはない。だから、念仏以外の一切の教えはいらない。いや、むしろ、信仰のさまたげに

なるといっているのであります。念仏以外は何もいらない。仏教には、八万四千の法門といって、沢山の教えがありますが、それを全部すてて、念仏一本で行くべしというのであります。こんなに思い切って、大たんなことをした人は、ほかにその類をみないのであります。

こうした強い、き一本な決断力は、一体、法然上人のどこから出て来たのでしょうか。ここで、私共は、法然上人のひととなり、おい立ちについて、ふれてみることにしましょう。

二、父の遺言にいきた宗祖上人

法然上人、くわしくいうと、法然房源空上人は、今からざっと八百二十六年の昔、長承二年（一一三三年）釈尊のお生れになった四月八日の一日前の四月七日、今の岡山県、美作（みまさか）国の久米というところでお生れになった。父は添間（うるま）の押領使（おうりょうし）今の警察署長といった役の、時国という源氏出身の武士でした。英雄や偉人の生れる時には、色々の言いつたえが残こされるものですが、法然上人の場合もそうでした。時国夫婦は久しく子宝に恵まれなかったので、神仏に祈ったところ、ある夜、時国の妻は「かみそり」をのむ夢をみたといわ

れ、また、その生誕の日には、紫雲がたなびき、屋敷の門前のむくの木に、源氏の白旗に似た一流れの白い布が、天から舞いおりてかかったともいわれました。かみそりはするどい刃物で、頭のするどく働く人を「あの人のかみそりのような人だ」とよくいいますが、法然上人は母がかみそりをのんだ夢をみたくらいだから、その頭脳の明敏なことはいうまでもありません。で、幼名を勢至丸と呼ばれた。勢至というのは、観音菩薩とならんで阿弥陀仏の脇士として、主として智慧の面で仏様のお手伝いをしている菩薩の名で、神童のほまれがあった法然上人の幼名としては、まことにふさわしい名前でした。

ところが、この勢至丸が九才になった春、となりの国の領主明石定明という者が攻めよせて来て、父の時国に深傷をおわせたのです。勢至丸は別名「小矢児」（こやちご）とも呼ばれて、弓矢の術にたけていたので、子供ながら手なれの小さい弓矢をとって、父を傷つけた定明に一矢をむくい、更に、引上げる敵を追おうとしたのですが、その時、父、時国は勢至丸をとどめて、苦しい息の下で、勢至丸にさとしおしえたのです。「黒谷源空上人伝」という書物には、こう書いてあります。

「我、死去の後、世の風儀に随ってあえて敵を恨ることな

かれ。これ偏^{ひと}えに先世^{さきよ}の報いなり。若しこの讐^{あた}を報わんと思わば、世々生々、互に害心をいだいて、在所在所に輪廻たゆることなからん。生ずる者は皆死を悲しむ。愁憂更に限りなし。我、この疵^{きず}を痛む。人また何ぞ痛まざらん。我、この命をおしむ。人あにおしまざらんや。我が情をもて人の思^{おも}を知るべし。然らば、すなわち、一向に、専ら自他平等の済度^{さいど}を祈り、怨憤^{おんしん}悉く消えて、親疎同じく菩提に至らんことを願うべし」

この言葉の意味は次のようになります。私が死んでも、世間の人のように、敵をうらまなひでおくれ。こうなるのも、前世の因縁なのだ。もし、敵を憎んで、あだをはらそうとすれば、敵もまたこちらを憎み、いつまでたっても恨みはつきないであろう。人間、だれでも生きている以上、死ぬことは悲しい。うけた傷も痛いし、命もおしい。しかし、そうだからといって、敵だって、傷をうければ痛がるだろうし、殺そうとすれば、命をおしがらるだろう。自分の痛み、自分の苦しみを以って、他人の痛み、苦しみを考えてやりなさい。そうすれば、自分と他人との区別はなくなり、一切の怨みや憎しみの心も消えて、みんな一緒に、手をつないで、平和な生活をしてゆくことが出来るようになるだろう。こういう意味になるでしょう。

當時は、復讐ということが奨励され、仇討が武士のつとめとされておりました。平家の清盛なども、死ぬ時に、

「われ死すとも眠れず、必ず源氏の奴ばらの首をひっさげてわが墓前にそなえよ。百万の経巻よりも供養になろう」と、ものすごい遺言をしたそうですし、富士の裾野で曾我の十郎五郎がやった仇討、さては、赤穂浪士の討入りなど、武士のかがみとしてほめたたえられたものでした。こうした日本民族の持つ、悪い一面ともいえる根強い復讐心を、自他平等という、強い仏教的慈愛の精神で打ちくだいて、逆に、敵をもわが身と共にいとおしみ、あわれんでやろうということとは、口ではいえても、仲々に実行出来るものではありません。その上、臨終の苦しみの中で、これだけの覚悟を示めした時国もえなかったが、それを守りとおした法然上人の、忍従の精神もなみなみならぬものであったことが知られます。

しかし、考えようによると、法然上人が仏道に精進し、空前ともいうべき仏教改革を断行し得た、そのしんの強さ、強じんな意志力、燃えあがる信仰心のみなもととはこうした父の非業の死、しかも、当時の封建社会の根強い風習に敢然と反対し、たち切りがたい怨讐の心をみごとに断ち切りおおせた勢至丸の非凡な精神力にあるものといえないでし

ようか。

子供の時分の、このような悲愴な印象こそ、法然上人をして、生涯、仏門に精進せしめた偉大なる潜在力となったことは、上人自ら成人した後、浄土宗門を樹立した際に述かいして、

「われ幼稚の昔より、成人の今に至るまで、父の遺言忘れがたくして云々」と述べておられます。

三、如来は罪人のためにこそ

島崎藤村の「千曲川旅情の歌」と云う有名な詩の一節に、

「昨日またかくてありけり

今日もまた、かくてありなん

このいのち、何をあくせく

明日をのみ、思いわずらう」

とあります。この昨日と今日、そして明日という、過去・現在・未来とつづく時間の流れの中でこうして、私が、そして皆様方が、共に、その日、その日の生活を送って行く、一見、何でもなかったことのようにですが、かみしめて味合いますと、ここには、深い人生の意味があり、また、仏の教えが読みとられて、まことにありがたいことと申せます。

なぜ、ありがたいのでしょうか。昨日、無事に一日をくらし、けさ、また、気持ちのよい朝風の中に、今日一日の働きを前に、元気よく、私共はめざましました。こうして、一日、一日、毎朝、毎朝を、喜びと感謝で送りむかえる。ありのままなる天地のめぐみを素直にうけて、また、静かに「とき」の流れにのって行く。心は平静になり、考えは正しく、生活は明るくなってゆく。

このような生活は、誰しものがのぞみ、すべての人が求める生活であります。そして、これを、仏教でいうならば、このような生活こそ「ほとけの生活」でありますし、また「極楽」の生活であります。ことさら、求めてむづかしい経をよむこともいらず、しいて、つらい修業をする必要もないのです。このような生活をするならば、すべての人は、そのまま仏になることが出来ます。決して、むづかしいことはない。

また、どんな愚かしいものでも、どんな貧しいものでも、また、どんなに悪いことをしたもので、こうした生き方に気がついて、すなおに、これをうけ入れてゆくならば、みんな仏になれるのでありますし、極楽浄土の生活が出来るのであります。

法然上人の念仏のおしえは、こういったもののなのです。

すなおにうけ入れてゆく心、これを「南無」という言葉であらわされました。何をうけ入れてゆくか。即ち、それは、ありのままなる天地の恵み、人のなさけであります。これを仏の「慈悲」としてうけとって、「阿弥陀仏」という、仏の名号であらわしております。ありがたい、もったいない、そういった心が言葉となって、「南無阿弥陀仏」と称えられる。

また、逆に、無心の心で、南無阿弥陀仏と唱えれば、心はおのづから仏の心に通じ、自らが仏の心ともなるのです。ですから、誰でも、念仏さえとなえれば、仏になれる。また、念仏のほかには、何もむづかしいことはない。――「善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただうまれつきのままにて念仏する……」といわれているのであります。

ですから、法然上人のところには、凡ゆる階級の人々が集って参りました。身分の高い人々としては、当時の天皇であつた高倉帝に戒をさづけられ、また時の関白九条兼実の篤い帰依をうけられました。その他、貴族や武士などで、法然上人の説法の座に列したものは非常な数になります。平の熟盛の首をとった熊谷次郎直実もその一人でした。また、源氏の武士の一人は、これから戦場にむかい、多勢の

人々と殺し合ねばならぬ身のおそろしさに、出陣前の急がしさの寸暇をさいて法然上人のところへ、教えを乞いに行きました。しかし、上人自身の本当の目的は、こうした上流階級の人々や、学問のある人にあつたのではなかつたのです。

仏教を知ろうにも、これを理解するだけの学問も、教養も、身につけていないもの、ありがたい説法をきこうにも、その日のかてに追われて、時間的にも、経済的にも余裕のない貧しい人々、更には、人前に出ることをはばかりような、いやしい職業の女性、常に人の目をのがれて、悪事を働く泥棒や盗賊、こういった、現実の日常生活の中で、あえぎ、もだえ、苦しんでいる人々に、何とかして仏の慈悲、念仏の功德を知らせたい。これが法然上人のまことのお心であつたのであります。

それだからこそ、住みなれた比叡の山をおりて、ことさらに、人々の集りに便利な京の町においでになり、求めて来るものには誰彼の区別なく、どんな年寄りにも、どんなに愚かしいものにも、よく分るように、念仏の教えを説かれたのであります。

こんな話が伝えられております。当時、京都の内外を荒しまわつて、殺人、強盗、追はぎと、悪事の限りをつくし

ていた、天野の四郎（別名耳四郎）のいう盗賊が、ある時、法然上人のおすまいに、大勢の人々が出入りするのを見て、さぞかしお布施も沢山たまっていることだろうと見込みをつけまして、その縁の下にもぐり込んで、隙をねらっていました。ちつとかがんで忍んでいると、きくともなしに、頭の上で法然上人が人々にお説きになっている法話が、耳に入つて来ました。

そこに説かれた教えというのは、どんな悪人でも、おのれの行為を反省し、さんげして、素直な心で念仏を唱えれば、仏は必らず救つて下さる。仏の慈悲とは、むしろ、こうして、自分自身ではどうしようもない悪業の中に苦しんでいる罪人をこそ、まづ第一に救うためにあるのだ、というのです。

これをきいた天野の四郎は、今さらながら、おのれが犯して来た罪のおそろしさにおののくと同時に、今からでもおそくない、仏はきつと救つて下さるにちがいない、そう思って、思わず念仏をとえ、そのままお弟子にもらったということでもあります。

勅修御伝という法然上人の伝記の一節には、次のように、したためられております。

「室の泊につきたまう。小船一そう近づきたる。これ遊

女が舟なりけり。遊女申さく、この罪業重き身、いかにし
ば、上人、あわれ候うべきと申しけれてか、後の世助かり
みて、のたまわく、げにもさようにて、世をわたり給うら
ん罪障、まことに軽からざれば酬報また計りがたし。……
若し余のはかりごともなく、また、身命を省みざるほどの
道心、いまだ起りたまわずば、ただ、そのままにて、専ら
念仏すべし。弥陀如来は、さようなる罪人のためにこそ、
弘誓も、たてたまえる事にてはべれ……」

播磨の国の室というところに、法然上人がおいでになっ
た時、遊女がやって来て、

「私のように罪深いものでも、ほとけさまはおすくい下
さるでしょうか。」

とたずねた。

法然上人は大変あわれに思召しになって、なるほど、そ
のような職業で生活をしていたのでは、さぞかし罪とがも
深く、そのむくいもおそろしいことでしょう。

「……しかし、ほかにこれといって、適当な職業もなく、
また、あなた自身もいのちにかえてもというような決心も
出来ないようでしたら、そのままでもよろしいから、ひたす
ら念仏をとなえて、仏の慈悲におすがりしなさい。阿弥陀
仏はあなたのような人をこそ救うために、お誓いをたてら

れて、仏となられたのです。」
と申されました。

耳四郎のような盗賊も、室の遊女も、さらには熊谷直実
のような、戦いで幾人ともなく人を殺したようなものでも、
すべて、念仏すれば仏になれる。そこには少しの差別もな
い。身分とか、職業とか、教養とかといった、外見的なも
のを、すべてはぎとって、念仏をとなえるということにお
いて、人はすべて同じだということです。阿弥陀仏の
広大な慈悲の光りを浴びて、その本願の力を信じて、一心
に念仏するもの、仏の前に出て、無心に手を合わせる場合
人々は、世間的な差別、へだたりをすてて、すべて仏の子
として平等無差別の姿になります。或る時、弟子
の一人が法然上人にたずねました。

「聖人の申す念仏と、在家の者の申す念仏と、勝劣いか
ん。答えて曰く、聖人の念仏と、世間者の念仏と、功德等
しくして、全く変り目あるべからず」

また、或る時、今度は法然上人が、弟子達に質問されま
した。

「源空の念仏と、道俗男女の念仏と同異いかん」弟子の
一人が答えました。

「いかでか、おん念仏の諸人の念仏にすぐれざること候う
べき」

(以下次号)

生命の起源

生命とはなんであろうか？ 生物が無生物から生れるとき、新しく生じなければならぬ性質はなんであつたろうか？

最も原始的な、したがつてまた最も根本的な性質はなんであろうか？ このような生命に関するいろいろの問題はすでに太古より現代にいたるまで

人々の興味を中心となつてゐる。とくに最近、ソ連の学者であるオパーリン博士によつて「生命の起源」という論文が発表され、ともに私たちの関心事となつた。

いま、オパーリン博士の「生命の起源」の問題ととりくんで、明らかにされたことをすこし解説してみるのも、あながち無駄なことではあるまい。

オパーリン博士は、それを物質代謝に求めている。生物は生きてゐるかぎり、常にたえず変化している。これは無生物には見られないことで、石を構成している物質が変化して

風化するなら、それはもはや石でなくなる。ところが、たとえば、われわれ人間の体を構成している分子は、常に入れ替つてゐる。今日の自分は昨日の自分とは異なつた物質である。そういった動きがなければ生物は存在できない。これが代謝であり、この代謝をともしなう流動的な系の発生こそが生物のもつとも原始的な形の生成なのだ。このためには少なくとも外界から独立した個体がなければならぬし、それが外界と自由に反応し変化發展するものでなければならぬ。

博士はこの線にそつて生命の起源のギャップをうずめようと努力している。かれの注意をひいたのは細胞の原形質に似たコアセルベート系であつた。アラビヤゴムや核配やいろいろのタンパク質を二種以上まぜあわせて、液の酸性度や温度やその中に溶けている塩類の濃度によつて溶液をつくるが、いろいろの条件によつて時には液状の小溜をつくることがある。目ではみえないけれども、顕微鏡の下でみると丸い粒をしている。この粒がコアセルベートとよばれるものであるが、液体であると、いろいろのものを自由にとかした

りすることができるのである。

博士はこのコアセルベートができる条件を検討するとともに、このコアセルベートの中でいろいろ酵素反応を行わせて、どのような変化がおこるかどうかが追及してゐるのである。

オパーリン博士の生命の起源の説によれば、そのようなコアセルベートが原始水圏に生れるが、その一つ一つがいろいろの性質をもつてゐる。

あるものは反応がにぶく、あるものは変化しがたく、そのまま動かなくなつてしまふ。そして、あるものは変化するが、崩壊し溶けてしまふ。

けれどもその中で反応性も豊かで、安定性もよく、發展する芽をもつものが長い時間の中にだんだん他のものを吸収して發展し、合成能力がすぐれ、反応性は高いが分解しないものが外界と反応しながら成長して、自然と淘汰により遂には成長能力を獲得して、現在の生物に到達したといふのである。



怠らず精進を

— 仏ねはん（二月十五日）によせて —

宮 林 昭 彦

いまごろの季節にお寺をおとづれてみると、堂内の幽闇としづもりのなかに、よく

仏ねはんの画像がかかげられているのを見ることがあろう。その画像には、諸天善神高弟たちにまじって禽獣までが仏陀の入滅を嘆きかなしんでいる。これは象徴的な図であるが、まことにすばらしい。

そこにみられる、仏ねはんのおすがたは、柔和な温容とそこしれない落ちつきとが感じられる。このことは、いかなる仏像にもみられる共通の特色であろう。

仏陀は、みずから人間的存在のかぎりない苦悩をおくそこまで体けんして、精神的な修行によって、苦悩をこえてぜったいの彼岸にまでたどりつかれたのである。そこには、貪りも憎しみも愚かさもなく、うご

かざるやすらぎの世界がひかりかがやいていた。

仏陀はすでにぜったい平安と寂靜の世界にすんでおられるのである。それにもかかわらず、そのまなざしは、此岸にあつて悶え苦しみ悩むもののうえに慈愛ぶかくそそがれている。

わたしたちが、象徴化された仏像を通して仰がれるあのふくやかな円満なおすがたは、よく仏陀の人となりを彷彿とさせるものがある。それはあたえられたものでなくして、みずから創りだしきずきあげた相好であろう。

いま、わたしは、ねはん像をおがみながら、とおく在りし日の仏陀の人となりを偲んでみたい。仏陀が、柔順温和であられたことは、その説かれたおしえをとおしてよくうか

がいしれるところである。すべての言葉や動作をとおしても、いかりたけたということはおおよそ想像もつかない。怒りにくるい、憎しみにみちた感情は微塵もみられない。

「うらみにはうらみをもつてしてはならない。ただ、うらみなきところによつてのみ、うらみをとくことができる」と説く法句經のおしえは仏陀の真面目がよくあらわれている。ここに仏陀の生活態度の基本的なすがたをみるのであろう。しかし、さりとて、ただうらまなないという消極的な態度ではなくして、すすんですべてのものをいつくしみ、あわれむといった積極的なおこないとなり生活態度であった。

仏陀の長い伝道生活においても、はつき

りとそのことがみえる。老いたるものも、若きものも、富めるものも、貧しきものもすこしの差別もなく一切平等に愛しつづけおしえを説かれたのである。世にしいたげられ悩めるひとに對するおもいやりは、まことにふかいものであった。

仏陀のあたたかい思いやりの心というのは、よく導く態度にもあらわれている。仏陀は相手の気持ちになり、その立場を理解したうえでおしえ導かれたのである。相手の気持ちにさからうようなことはいわれなかった。それは、むしろ相手の立場になつて、ともども手をとっていっしょに引きあげてみちびくという方法をとっておられる。

仏陀は完全な知恵をもっておられたが、その人その人の機に應じて方便をもつて、まことのみにちに導かれたのである。また、一面仏陀はおしえを説き、語るべき真実のことわりについては語られたけれども、語るべきでない無駄なことは語られなかった。用もなさない形而上的な議論はさげられて、いま当面している現実の問題としん

けんにとり組まれている。そのことを比喻をもつて語っておられる。

「ここに毒の矢にあたつたおれた人があるでしょう。周囲のものがあつまつて治療をうけるようすすめた。しかし、その人はその毒矢についてすべてのことがわからないうちは矢を抜かせないとする。この矢はどこからとんできて、どんな矢で作られているか、又矢を射たものはどんな身分でいかなる種族のものか、皮ふはどんな色をしているか、などと考へていて、これが不明のうちは矢をぬかないとするならば、その人は満足な答えがえられないうちに、自分の生命を失つてしまふであらう。」

このように、解説に関係のない無用の議論はいましめられている。学問をし、語ることになれすぎている近代人はよくよく味うべきことであらう。

さらに、仏陀の人がらの特色として、寛容ということをおもはすにはおられない。仏陀は真理のみにちを説くのにひたむきな情熱をささげられたけれども、それは、けつして強要はされなかった。相手を傷つけおどしても屈伏

消えざる灯ともしび

八十年の長い生涯も、いよいよ終りに近づいたことを悟られた、大聖仏陀は、ひそかに「入涅槃」のお心をかためられた。

三十五歳で成道された時も、矢張りそうだった。どうしたら、自分が悟り得たこの偉大なる真理を、ひろく大勢の人々に、わかりやすく、おこない得るように説き示すことが出来るだろうと、随分、苦心をされたことであつた。それでも、梵夫がわざわざ天から降りて来て、懇請こんぐんしたためもあるが、爾來、その教えの広布につくされて来たのである。大勢の、悩み苦しむ人々は、仏陀の説かれた四諦によつて、苦のもとを知り、八正道によつて、雄々しく生きるすべを得て、生れかわつたように、楽しい人生を送ることが出来た。こうして、四十五年の伝道生活の間に、仏陀の救われた人々の数は無数であつた。

しかし、一方では、滅することのない、偉大なる生命の体現者としての釈尊も、他面では、所詮、死すべき「肉体」を負う、

させようとすることは決してなかった。

ひとはそれぞれの立場をもっている。その人の環境や職業や身分によって、各々立場を異にする。解脱への道からみれば、それらは絶対的なものではないけれども、さりとて道をあゆむための出発点はそれぞれの立場にある。自分の立場を忘れて出発することはできない。仏陀はおのおのの立場の異なることを認めて、各自が足もとをみつめながら正しく前進するようおしえ導かれた。

しかし、仏陀の寛容の精神は、単なる妥協でもなければ、迎合でもなかった。あくまでも真理のまえにはこよなき厳しさがあつた。他のおしえによつては、おしえをひろめる急のあまり、異教をゆるすことなく破かいし傷つけるのがしばしばであつた。

しかし、他を傷つけることは、みずからも傷つくことであることをかれらは知らない。

みずからには、厳しすぎるほどきびしく、他に対しては、おおらかな包容のちからをもっていた仏陀は、個々の異なる立場

をみとめつつ、それらを大きく包容し純粹な解脱の一色に統一していったところに、量りしれない偉大さが感じられるのである。

わたしは今、仏陀の人となりをあれこれと思ひはかりながら、このように、すべてのひと、あらゆるものにふかいおもいやりとあたたかな愛情をもち、量りしれない寛容のこころをもった仏陀に、一度でも接しおしえをうけたものは、けつして忘れえないつよい印象をのこしたことであらうと、しみじみとおもうのである。

されば、仏陀に対してそこしれない偉大さを発見し、はかりしれないふかい温情のなかにみちびかれてきた弟子たちにとって、その大いなる死はどのような感情のなかにうけとられたであらうか。

沙羅樹林のもとにしつらえた床のうえに、

老いとおとろえの身をよこたえて最後の教誡をなさるすがたを、何びとが予期したであらうか。きつと、あまりにも偉大であつたがために、仏陀は不死身であり、永遠に肉体もほろびないと信じていたことであらう。それが、予期に反して、死を宣せられたのである

一個の人間にしかすぎなかった。その肉体も、今は既に老い衰えてしまった。形のあつたもののすべては、移り、変り、滅する。この絶大な真理の前には、釈尊といえども、これに従わねばならぬ。釈尊のうれいは、そんなところにあるのではない。もつと深く、そして遠いところにある。すべての人の悩みをおのれの悩みとする釈尊は、思われた。

「わが亡き後、わが愛する弟子達は、一体どのようなにして、それぞれの道を歩んで行くことであらう。ともしびを消された、旅路の夜はさぞかし、暗く、行きなやむことであらう。しかし、一度は必らず、追つて来る現実にはかならないのだ。何とかして、彼等のすすむべき道を照らしてやらねばならない」

思ひは同じであつた。仏典に語られる釈尊涅槃の情景は、弟子達の、釈尊に分れ去る悲しみと、師なき後の、自分達の行くべき道のしるべをいかに求めるかということにあつた。

弟子達のこうした危惧に対して、答えら

から、弟子たちや、信者たちの悲しみと愁い、そして驚がくは想像に絶するものがあったであろう。

「世尊よ、師なきあと、わたくしたちは、なにをよりどころとして生きていったらよいでありましょうか」阿難のとまどいながらの問いに対する仏陀の答は明かくかぎらないものであった。

「なんじら、自らをとしびとし、法をともしびとせよ」

このことを、法句経にときあかされてい

る、

「おのれこそおのれのよりどころである。おのれをおきていづれによりどころをみよ。よく調御されたおのれこそ、えがたいよりどころである」と、いう一説とあわせ味うとき真実の法にてらされみちびかれ、よく調えみがかれた自己こそ最後のすくい手とみなすこのおしえは、わたしたち仏教徒の基本の態度として、吟味されうけとられねばならないであろう。

そして、最後にのこされたことば、「すべてのものは、みな移りかわってゆく、な

んじら怠ることなく精進せよ。」

まったき使命を果して、静かに八十の命をとちようとしている仏陀の最後の遺訓は、なにもまして比類なき尊さが感じられるのである。

仏陀は、その人がらにふさわしく辺鄙な寒村で弟子たちにみとられながら静かに入滅された。精神のうえでは、ぜったいの自由、すなわち解脱をとげられた仏陀が、なお肉体のやまいに悩みながら八十の生涯をとじられたということとは、きわめて印象のふかいことである。人間であられた仏陀の死はまた当然ともいえよう。すべての現象がうつりかわっていくすがたを、身をもって示され、いかなるものであつてもさけうべきことでないことをおしえられたのである。

いま、仏ねはんの画像をちつとみつめてみると、そこに表現されている以上のおく深いところが感じられる。事実、かたちのうえには絢爛さも豪華さもなく、ごく簡素に慎ましく、としびが消えさるるように、静かに命おわられた仏陀ではあろうけれども、その内にひそむ無限の豊かさは、人類のうえに永遠にかがやきつづけるであろう。

れた。

「みよ、わが手の上にのせた、ほんのささいな土塊も、それが形のある限り、必らず、いつかは滅し去らねばならぬ。そのように、わたしも亦、今や、わが生涯を閉ちて、分れ去らねばならぬ。今までは、わたしをめぐりあてとし、わたしをともし火として来たであろうが、わたしの去ったあとは、この世界の中で、変ることのないものをめぐりあてにし、すすんでもらいたい。それは、わたしが今まで、お前達に説き示して来た『おしえ』と、それを行なおうとする、お前達自身の心とにほかならない。この二つ丈けは、決して、消えることもなく、また、お前達を、わたしと同じく、さとり得た、真の人間としてのめざめに導くことである。されば、いたづらに、悲しむことをやめて、むしろ、わたしが今日まで、説き与えて来た真理の光が、本当に輝き出づるのを喜びを以って見守っておくれ」

柔和なそのお顔にも、も早も死の陰はきざして、はるか、朽ちることのない、永遠の世界に、一步、踏み出されようとする釈尊を、静かに待ちうけているが如くであった。



供養の文字

中村素堂

春のやわらかい陽ざしが、ものの音もしない様な静けさで、二月堂と路一つ隔てた法華堂の板戸や白い壁に映っている。

二月堂はお詣りの多い観音さまであるのに、この通称三月堂という法華堂の不空羅索さまは、観光客の少い時は実にしづかで、あの半眼の月光菩薩のお顔が閑寂を一きわ深めている様にさえ見られるのである。

西側の方が、たしか人の通る広庭に面しているのに、夕陽が軒ふかくさし込む時分に、あの天平創建のお堂の中にと、仏さまのお顔も片明りがして、遠い遠い時代の人々の信仰の心に触れるものを感じるが、私はこんな時分にあのお堂の西側の柱に刻まれた、今から八百年も前の人の、そうせずにはいられたかった落書に見入り、西陽に温まった古い柱に手をふれて、泌々と感慨にふけたことがあった。

長承何年、仁治何年などという、八百年ほど前のも

のが三つか四つあったが、

保延元年八月廿三日千日満但結願九月十二日畢と書いてあったのが、今でも最も心に残っている。崇徳天皇さま、近衛天皇さまの時分に流行た、一つの信仰の形であったと思はれるが、千日花といって約三年間毎日仏さまに花を捧げてお詣りをする、お詣りの満了に達した日、三年間も心にかけて通ったのが、今日やっとそのお誓いを果たしたという、信仰を持つものでなければ判らない、深い深い感激が、自然にこの御堂の柱にこんな言葉を記しておきたくなったのではないであろうか。

これは女性かしら、それとも善い男であつたらうか、などと想像をたくましくしつつ、この字に手をふれているうちに、知らず識らずその誓い人の清らかな喜びが判る様な気がして、眼がしらの熱くなることであつた。



だから私は、この文字はどうも落書きというのには、少し勿体ないとさへ思っている。そしてその書風も時代の風が匂って、そんなに拙いものではないのである。

また昨年落慶の式が盛大に行われて、旧観に復した宇治の平等院にも、正面のたけの高い扉。この世ながらの極楽の美しさにと、名匠を頼んで描かせた九品往生の絵の扉も、手のとどくところ一面の落書である。

その落書きの中にもよく見ると、遠い他国から遍歴して来た人の、生国や生れ年を記したものなどが、愚かないたづら書きの中に混って、消えそうになりながら、ほのぼのとしたものをただよわせていた。

このことを書いてみると、余程前のある秋に信州の方に遊んで、上田在の別所温泉に国宝の安楽寺の塔を訪ねた時のことが思い出される。

この寺の八角三層、裳階もくしのつい珍らしい塔へ登って行く手前に、鉄眼版の一切経を入れた白い一棟の土蔵があった。土塗りの扉も大分傷んでいたが、この白い壁や扉にも、掻いた様な落書き、矢立の墨でしたものなど幾つかの落書があった。

ふるてらのはしらにのこるたびびとのなをよみゆけ

どしるひともし

秋草道人のこんな歌は、まさにこんな時のことであろう。今どきのYM生などという落書きと共に、百年も或はもっと古いかとも見られる落書きも、共にこの壁に消え残っていて、その余りにも遠い土地から廻国して来て、同行二人としてある字などに出あって、書いた人の姿に想到すると、何かおのづから合掌でもしてあげたくさへなったものである。

しかしこれらはみな、何も文章という程のものではないから、勝手にこちらが想像しているまでのことであるが、熱田神宮の近くにあった裁断橋のからかね作りの擲宝珠、この擲宝珠に刻んであった文字ほど人の心をうつものは、まづめったにないと信じている。

天正十八年二月十八日に、山田原への御陣堀尾金助と申、十八になりたる子を立たせてより、又二た目とも見ざる悲しさの余りに、今此の橋をかける成、母の身には落涙ともなり、即身成仏し給へ、逸岩世後と、後の世の又後まで、此の書きつけを見る人は、念仏申し給へや、三十三年の供養也。と、かな書きや漢字まじりなど四種類かに、同文のものが刻んであった。亡くなった子供の為に橋を供養して、念仏を所望をして



いる。人の子の親でなくてはこんな美しい言葉は出てこないのではないかと、文字の鑑賞を忘れて、一篇の詩の様なこの母親の嘆きにつりこまれてしまうものがあった。

これらはみな供養のこと、仏詣でのごことが文字になっているのであるが、文字そのものを供養したものは老なる写経の一群ではないがあらうか。

お経を写す、これが仏への供養であるとした。天平期の官設写経所が、そろそろ私の写経所に移ってゆく頃から、特に経の供養写しが始まった様である。尤もそれ以前にも、たとへば光明皇后さまの、父不比等、母橘夫人の冥福の爲めという奥書きを一々書入れた、一切経の一群などもあるから、古くからお経を造願した勝因によって、永く福祉を得られる様にと祈ったものはあったのでもある。

しかしこれは時代の下るに従って盛んになり、平安鎌倉、室町を通じなかなか心ひかれるものが出来た様である。

足利尊氏なども、後醍醐院の追善の爲めという写経や刷り経を幾つも作っている。あの世評の悪かった武將が、後醍醐天皇さまの爲めに安国寺を全国に建て

たり、又こんな奥書きを入れた大部の造経をしているのを見ると、一世の英傑の心の裡にも、史書の表にあるものとは違った、勝てるものも亦哀しかったのではないかと、ゆかしく発願の言葉書きが読みかえされるのである。

これは日本の話であるが、中国の竜門やその他の驚くべき多くの石仏像の造願によせられた供養の文字にも、仏にすがらずに居られなかった、人の世の敬虔な心を見出せるのであるが、それはまたの日にしましう。

ひとのぼた餅

キリストは或る日のこと、野辺に咲く可憐な野菊の花を指していった。

「この一本の野菊の花にさえ、ソロモンの栄華にくらぶものもない、大いなる力が宿っているのだよ」と

私という一個の人間も、今日の日まで生きてこられたのも一人の力ではない。世の中のありとあらゆる力——作用——が私の上にこりかたまつて、私という人間が存在する。野菊の花と同じである。このことを、アメリカのすぐれた哲学者ホワイト・ヘッドも「凝集の原理」という言葉であらわしている。

青い鳥ではないが、よく自分の足もとをみることだ。

浄土歌壇

岩野喜久代選

天

向井きつ

白百合は首をあげて庭に咲くただ

一本の茎を支へに

評 清麗な中に凛とした力が通っている。

地

石黒しづえ

二十五年添ひたる夫を語らざる喪
にある友の冷き表情

評 甚だ小説的でかかる不幸な夫婦も世にはある。

人

久地楽真弾

秋の川白く乾きて野につづく路と
思へり月ののぼれば

評 川が路か、路が川か月明のいたづら。

長崎恒子

旅二日終へてもどれば灯ともして
我が家なつかし夫と子とまつ

一迫春子

書を置きてあかつきの鐘きき入り
ぬふとかりそめのヒロインとなり

多田 勲

柿食へば故郷を思ふ今も猶わづか

なことに悲しき男子

串岡君江

貧しては外地の暮しにまた触れつ

夫はもだして新聞読めり

神徳凱一

天地のふかきめぐみを思へども草
うら枯れぬ寒き日は来て

熊坂 満

富士に飛ぶ白雲あれば芦の湖のモ
ーターボートまた飛ばんとす

上岡歌子

熱高き子を背に負ひて医師に行く
町にわびしく星一つ見ゆ

野口かずえ

山積みになれし鉱石をばねんごろ
に撰れる鉱夫の傷きし手よ

張山はるみ

二三度は気にもとまらず抜きたれ
ど今朝白髪みて心あはてぬ

竹上盛衛

小学を卒へて三十年友と寝る髪色
うすき頭ならべて

上野常弾

秋空を高く飛び立つ羽田よりあす
はローマの客となる友

葛岡利子

あすよりは見がたき子らをしのび
つつ白菊生けて学校を去る

阿部キヨ

怠りを弱き体の故にして己が心の
言訳にする

星野千代

大宇宙へ衛星はなつことなりぬ芥
子粒ほどの人の力に

選者 詠

経を負ひ遠く行く子を思ふ日よア
メリカ東部大雪すとか(国訳一切
経海外宣布)

投稿規定

はがきに一回二首以内とし
「浄土」編集部歌壇係あて
に送ること

仏教ものしり帳

鬼子母神

鬼子母ははじめ、インドのマカ
ダという国に生れた女であった
が、何故か人の肉、ことに子供の
肉を食う癖があったので人々は彼

女を鬼女鬼女と呼んで、彼女が近
づくとき子供を家の中にかくして殺
ろされぬように怖れた。このこと
を聞かれた釈尊は何とかして、人
の肉をたべるといふ恐ろしい行為
をやめさせようとお考えになつ
て、法力を以って、彼女の子供の
一人をおかくしになった。彼女が
嘆き悲しんでいるのをみて、釈尊
は「多勢いる自分の子供が一人い
なくなつてもそのようになげくの
に、何故お前は、人の子を多勢殺
ろしたのだ。子をとられた人の嘆
きをよく味つて、今後は子供を食
うことをやめにしなさい」と、こ
んこんとさとして、人肉の代り
に、その味が似ているといわれる
ザクロの実をたべることが教えら
れた。彼女は前非を悔いて、以後
仏のいうとおり修業して、一切
の女性のおそれを除くことを約束
してついに菩薩となった。

日本に伝来してからは、子供を
守る神としてひろく信ぜられるよ
うになった。

日蓮宗では恐ろしい鬼神の姿の
像を飾るが、他の宗派では天女の
ように優美で、宝冠をかぶり、宝台
に坐して両脚をたれ、数人の子供
にとりかこまれてゐる像になつて
いる。東京では雑司谷のが有名。

信仰相談

(質問歓迎)

担当 佐藤賢順

問

二十七歳の青年。大学を出て二年前から或る会社に勤めています。祖父が信心深く、子供のときよくお寺へつれていかれました。祖父は仏壇の前で、毎朝、お経を

識を捨てなければ信仰へ入れないように教えられていたためではなからうか、ということ

読んでいました。お経の意味はもちろんわかりませんが、お仕舞い頃に法然上人の一枚起請文というのを読みました。その文句が所々耳に残っております。そんなせいか、なんとなくそれに心がひかれて、祖父が用いていたお経本を出して、時々、一枚起請文を読んでみます。意味は大体わかりますし、何か盛り上ってくるような、圧迫されるような、大きな力が迫ってくるのを感じますが、ただそれだけであまり深い感銘を受けません。どうしてだろうか、考えてみました。そして気がつきましたことは、その中に、「一文不知の愚鈍の身になして」とか、「無智のともがらに同じうして」とかいうことがあって、知

私どもは小さい時から、学校、学校、勉強、勉強と、やかましくいわれて、その事ばかり

考えてききました。この頃は、科学教育の普及、理学部の増設などと、自然科学の教育がやかましくいわれております。こういう時代に、とくに私ども若い者にとって、知識を捨てるということとは、とてもできないことです。が、知識を捨てなければ、信仰にはいれないのでしうか。(横浜市港北区 高崎行蔵)

答

私も学生の頃、かなり長い期間、そういう落ち着かない気持を持っておりまして。一枚起請文は、法然上人が晩年になって、纏められたお言葉で、八十年の生涯の苦悩と思索と研鑽が結晶したものですから、そうやすやすと解するというものではありません

ん。私はいつも思うのですが、私の経験からいいましても、この法語の深さは、読む人の年令とともに深まっていくので、十代や二十代で、これに感心したという人があれば、却って不思議だといってもよいのです。

お尋ねの知識を捨てよという教えですが、その通りです。知識では信仰にはいれませんが、しかしそれは近頃の流行の邪教迷信のようには、自然科学を否定したり、学問研究を無視したりすることでは絶対にありません。人間の智慧の力の及ぶ限り、思索し、実験し、研究して、宇宙の神秘を究め、これを合理化していくことこそ仏教の精神です。真実を追及する。これが仏道の本質であるといってもよいのです。ですから、自然科学が物の真実を追及するたゆまぬ努力こそ仏道の精神と通ずるのです。ですから学生は勉強第一です。し、ロケット時代でなくとも自然科学の普及と研究は、人間生活を豊かにし楽しくするために、一日も疎かにすることのできないことです。「無知のともがらに同じうして」と教えた法然上人自身も、実は非常な勉強家で、本を読まなかったのは、「木曾義仲、落洛乱

入の日」一日だけだったと述懐しておられます。

それならば、なぜ一文不知の愚鈍の身になれというのかといいますと、結局、人間の知識では、人間を超えた絶対のものは割り切れない。計りきれない。知り尽せないのであるから、知識でそれを割り切ろうとするような、考え方をやめよ、ということです。自然科学の発展は実にめざましく、科学の世界では半年も経つと、前の研究は古くて役に立たなくなります。文字通り日進月歩ですが、その半面、もうこれで完成したという所はありません。人間の知りうることは大海の一滴にも及びません。人間の知識はすぐ限界にぶつかってしまいます。ですから人間を超えた世界は、計り知れぬほど大きいのです。浅くはかない人間の知識で、この深く大きい人間以上のものを計りきろうとすることを止めよ、というのが一文不知の教えです。

自分の知性の限界に気づくということが信仰にはいる大切な動機になるのであります。

問

昨秋、ソ連の生化学者、オパーリンが来日しました。この人は、地球で生命

が発生した最初の状況を研究した人で、生命は地球の進化の或る時期に、蛋白質が炭素から発生したと説いています。そして、その時の状況を再現すれば、生命を化学的に作り出すこともできる。やがては人間の生命も、化学的に創造することができよう、と説いて、画期的な新学説で世界の人気を呼んでいきます。キリスト教は、旧約聖書にありますように、神が万物を創造した、という教えが根本となつていきますから、人間が生命を創造するというこの学説は、旧約の教えと反することになり、問題を投げているということですが、仏教の側の御意見はいかがでしょう。

(M社学芸部記者)

答

十九世紀にダーヴィンが、人間は猿から進化した、と言いつ出したときにも、

宗教界はかなりの衝動を受けたようでした。神が人間を創ったのではなく、猿から進化したことになったのですから。今度のオパーリンの新説は、生物進化について、ダーヴィンが扱った生物進化以前の発生の問題を扱って、人間が生命を作ることになるのですから、キリスト教への衝動は、一層大きいかも

しれません。

しかし仏教にとっては、一向に何の影響もありません。仏教では初めから、創造説というものはありません。(仏)如来が人間やその他の万物を創った、という思想はありません。仏教の考え方は縁起です。すべてのものは縁によって起っている因縁によって生じている。相依相関によって生じている。世界はそのままだ連関である。と見るのですから、オパーリンの新説も、別段に影響がありません。

オパーリンが創ることができるという生命は、原始状態の生命で、決して立派な有機体の生命ではありませんが、もし将来、人間の生命を創ることができるようになったとしても、それは他人の生命のことで、この「わたくし」の生命ではありません。これは大切なことで、いかに科学の力で他人の生命が作られるようになっても、「わたくし」の今、生きていくこのいのちとは関係のないことです。宗教は今のこの私の命の救いという主体的な問題なのですから、化学的に生命を創造することとは別問題であります。



列車の中で

村田 嘉久子

先日二宮の知人宅へ出かけました。其日は

あいにく色々の用事が次から次へと出来て、
やっと出かけられるようになったのが夜も十
時過ぎていました。丁度銀座の会合の席から
出かけたので東京駅へ、八重州口から切符を
買ってプラットホームへ急いで、やっと十一
時何分か前の汽車に乗る事が出来たのでし
た。

処で、二宮は一番後の箱に乗るのが便利な
ので12番の箱へあわてて乗込むと、私のすぐ
後からこれまたあわてて乗込んだ男がありま
した。大きな風呂敷包みを肩に背負って、洋
服の体を猫背のようにして、フラフラしながら、
そのくせ私を突飛ばさないばかりにあわ

てて入って来ました。私は工合よく空いて居
る四人詰の一つへ腰をかけましたが、言い合
せたように私の前の席へ腰を下して、私の顔
を見てニヤニヤ笑ったのです。

此日私は、二三日内にあるテレビのセリフ
を覚えたいので、此時間なら大丈夫……と思
って、空いている汽車へ乗った訳で、実は大
勢乗客があつたとしても、自分の席だけは静
かに暗記出来るようにと願っていたのでし
た。幸い四人詰が一カ所空になっていた、ヤ
レ嬉しやと一つの席に腰を下した矢先でした
ので、此見知らぬ、大きな包みを背負った洋
服の男が、わざとのように私の前に席を取っ
てニヤニヤ笑いかけられたのにはウンザリし
ました。

これはきつと話好きの人で、汽車が動き出
す時から喋べりつづけるのではないかしら、

という不安で、私は外の箱へ行けばよかった
としみじみ後悔したのでしたが、間もなくそ
の男が少し酔っている事に気がつきました。

酔ばらいにくだを巻かれたんぢややり切れな
い、という気持までして、自分ながらイヤな
顔付きにならざるを得なくなったのですが、
男はその大きな包みを大事そうに両手で叩い
て私に

「奥さん済みませんが一寸これおたのん申し
ます……」と言ったかと思うと、私の返事も
待たず、そそくさとどこかへ行ってしまう
した。私はあつけに取られて、然しのそ大き
な包みを（反物でも沢山入っているようだし
たが）見詰めたまま、自分を安心な人間だ
と、とっさに考えて頼んで行ったのでしろう
が、もしこれが私が悪い女で、このままその
包みを失敬してドロンを極込んでしまった

ら、どんな顔するだろうと、つと可笑しくなったりしました。やがてかなりの時が経って発車ベルが鳴ると同時位に、あたふたと戻って来て、ヒョコン、と頭を下げて、又包みを両手で大事そうに撫でくいるのでした。

汽車が出てから、私はなるべくそつちを見ないように、体をずらし

て其男とは無関心らしく装うとしたのですが、反

対に男はニヤニヤしながら、私に話かけよう話か

けようという様子を見せるのです。エへへ、と笑っ

て見たり、あの……と詞をかけてくるのですが、

私は私でここで、弱味を見せて話込まれでもした

ら大変、セリフも何も暗記出来なくなる、と思

ったので、ニヤニヤする顔をそつぽ向いて知らん顔して

いました。やがて男は酔の廻ったように、体をあっちこっちフラフラさせながら、「ねえ奥さん！」と話かけて来

ていましたが、聞こえなかったとでも思ったものか、今度は大きな声で、「ねえ奥さん、奥さんはどちらまでいらっしゃるのです？」と、酔ばらいのにこったような眼を私に向けて、どうしても返事を聞かすにはおかない、というような態度をするのです。私も少しむ



すると相手はどうしたのか、得たりとばかりニッコリして、「誠にすみませんが、私は平塚まで行くのです。きつと寝てしまいますから奥さん起して下さい。お願いします。」と言ったまま安心したように、その包みを自分の左側の方へ置きかえて、自分は窓を半分開けて両脇を突き、私の返事も待たず、頭を半分窓の外へ突出すようにして眠ってしまいました。

あつと言う間もない、眠も応もない、全々此方の考へなど無視してしまつて、いい気なものです。私も今更呆れて少時、窓わくに両脇を突き、それに頭を抱えるようにして眠ってしまった男を眺めていましたが、其内ああこれで、此方もセリフの暗記が出来るとホッとししました。ニヤニヤしたり、話かけたがったりしたのはこれを頼みたかったのかと思つて、苦笑するよりほかありませんでした。

処で、私は台本をおもむろに取出して、読んで、覚え、又見ては暗記するつもりで、読出したところが、妙に心の落着かない自分に気がついたのです。それは、此方は下りの汽車ですが、時々上りの列車や、電車と、すれ違うのですが、其時思わずハッ、とさせら

れる位いに、眠って居る男が乗り出して居る事に気付いたのです。反対の汽車がゴーツとすれ違う度毎、思はず、其人の脇を引張り込みたい衝動にかられるのです。

ハラハラする処でなく、今にも男の首がもぎ取られて仕舞いそうな錯覚さえ起きるのです。堪らなくなつて此方まで思わず腰を浮かしてしまふのですが、相手は平氣の平座で、いい氣持そうに、スヤスヤ寝込んでしまつて居るのです。

其内、明け放しの窓から容赦なく夜の冷たい風が流れ込んで来る、すると後の方の席に居る人や、すじ向うの席に居る人達が、迷惑そうな顔をして私の顔を見るのです、此方が悪い訳でもないのに何やら面目なさそうな氣分にとらわれて、私も困つたような顔をして其人達の方を見る、向うも一層嫌な顔を露骨にして見せる……ここの処は無言劇見たいな事が少時あつて、私も少しイライラして来ました。

もう完全に氣が散つてセリフを覚える処ではない……何んの因果で、この汽車に乗ってしまったのか、こんな男にこんな頼まれ事を

してしまったのか、自分ながら、プリプリしながら、其男の脇を邪見にこづいて、「他の人が迷惑して居ますよ、窓を閉めますよ」と言いながら、無理に首を引込ませて窓のガラスを下してしまいました。すると男はさも恨めしように私の顔を薄目に見詰めながら、窮屈そうに窓わくの細い処へ両脇をかけそれへ頭を乗せて又白河夜舟です。

今度は汽車のゆれる度にのめりそうになる、其男が氣になつて、どうにも台本を読むどころか、セリフを覚へるところか、今にも床へのめり込んでしまひやしないかとハラハラしたり。

其内大船も過ぎ、藤沢、辻堂、茅ヶ崎、と私のセリフを覚へたい氣持とは反対に、今夜の汽車は非常に早く走つて行くように感じられるのです。今日は何んたる因果な日かと、これも何かの因縁かと、私もあきらめずにはいられませんでしたが、茅ヶ崎へきた時、慌てて起してやつて、びっくりして戸まどいでもされてはいけないと思つて、茅ヶ崎を發車した頃から、少しづつ起してやりました、

「此次が平塚ですよ」といくら言つても中々

起きよとしないので、此方の方が氣が氣でなくなりしましたが、今平塚の駅に入ろうとする処で、やつと眼を覚まし、初めは、私を恨めしそうな、何故起すんだ、というような眼をして見ていましたが、駅員が「平塚々々」という声に、とび上らんばかりにして、立上り、今度は私に叮嚀にお叩頭をして、「奥さんありがとうございますありがとうございました」と何度も礼をくり返して、その大きな包みを肩に背負込み、扉に行くまでも、私の方にお叩頭をしながら、慌々しく降りていきました。その姿を見て、私は、今夜、完全に、あの男の付人かなんぞのようにされて仕舞つた腹立しさも、又大切なセリフの暗記の出来なかつた口惜しさも、何も彼も忘れて思はずホッと、安堵しました。

私がいなかったら、あの大きな包みもどうなつたか、あの窓から突出した首もどうなつていたか……というような事を考えて、セリフは覚へられなくて情けなかつたけれど、矢張りいい事をしたんだと、自分の心に言い聞かせた事でした。

藤井 実応 著

「法然上人と一枚起請文」を読む

法然上人のみ教えを解り易く解 区芝公園十九浄土宗務所内から
説かれた伝道書が欲しいという私 出刊されたもので、正に意義深大
達の望みが達成されました。

藤井実応先生の「法然上人と一枚起請文」がそれです。

先生は申す迄もなく多くの方が御承知の通り浄土宗の布教師として独特の御活躍をなされておる大宗教人にして浄土誌にもなじみが深く、「法然上人法語抄」や「病む人へのおとづれ」といったような名著も多くあり、それらが絶讃をあびておることも私が喋々する迄もありますまい。

今、この「法然上人と一枚起請文」は上人七百五十年御忌の記念出版としてその準備局（東京都港

人、わが国に於ける宗教改革、其の時代、誕生・幼時、父の遺言、

仏道修行、浄土開宗・教化・法問、迫害・法難、詠草薫る。遺言入滅、偉徳讃仰の十三章からなり、後項は一枚起請文と其の由来、念仏の略史、観念の念仏と学解の念仏、選択本願の念仏、結帰一行、二尊の前に誓いて、一向念仏、奥書の八章からなっております。

前項法然上人では釈尊から始めて三国仏教史上に於ける念仏の流れ、進めて法然上人に至っての念仏の開花、法然上人の時代と伝道に就て実に快適に要述され、後項一枚起請文に於ては、一枚起請文の貴重さ、重要さを、その深い信心の上から解り易く解釈し、しかもその中で浄土宗の教義が良く理解されるように述べられておられます。

浄土宗の寺院は勿論ですが、浄土宗の檀信徒であったならば一家

一冊必ずこの書はそろえたいものであります。

内容の詳細に就ては、御覧になれば判ることですからここで一々申し上げませんが、今私は直接先生からこの著の贈呈を受けて拝読感激の余り広く御紹介申し上げたいと思つて筆をとつた次第であります。

御一同様の必読をおすすめて致します。

非売品ですが前記宗務所内の準備局に御申し込になれば良いと思いますが、菩提寺の和尚様にお願ひされるのが最もよいでしょう。

（須藤隆仙）

藤井実応 著

法然上人と一枚起請文

新書版 二四〇頁
領 価 一三〇円
送 料 一六円

東京都港区芝公園十九号地
申込先 浄土宗務所

蘇峰翁の戒名のこと

佐藤賢順

十二月二日は徳富蘇峰翁が亡くなられてから初の命日であった。かねて矢野国太郎氏から、初月忌には一晩ゆっくりと話したいから都合して回向に来てほしい、ということであったので、夕刻からお邪魔した。

○
矢野氏夫人鶴子女史は蘇峰翁の末女である。矢野家と私とはいろいろの仏縁で三十年代の昵懇である。蘇峰翁も昔、一度、私の寺へみえたことがある。

読経のあとで、夫人から翁の臨終の様子を細々と伺った。頑健だった翁も、最後のボーコー炎には打勝てず、とうとう亡くなられたが、酸素吸入器をかけるようになってからは、すっかり覚悟をされて、静かな往生を遂げられた。「大往生でした」と夫人は言った。

○
世間では翁はクリスチャンだと思いついてゐる。もともと熊本洋学校を出て、同志社に学び、キリスト教方面との交遊も深かったし、東京での葬儀は、十一月八日、靈南坂教会で行ったのであるから、そう思うのは当然であろう。しかし翁の伊豆山での葬儀は、御殿場の臨濟宗青竜寺の住職が導師をつとめた。翁には特定の宗教へのこだわりはなかったようである。

○
仏教でもキリスト教でも、有縁の人にはみな来てもらつて、回向なり追悼なりをしてもらう、という寛容が翁の宗教であつた。引導も渡してもらつし、讃美歌も歌ってもらつ、というのであつた。

扉の御法語

御法語を拝読するために、断固たる強さを感じます。とや角と愚しい議論をするな、上品に往生することは、自身の榮譽ばかりを希うのとはわけがちがう。衆生を救うという大目標があつてすることであるとしつて咤されたものであります。

この御法語は、三部経釈に出てゐる句であります。三部経釈は、三部経の要点を教えられたもので、短い文ではありません。この文の終りの方にあるわけですが、その前後をみますと凡そ次のようであります。

浄土には上品上生から以下下品下生までの九つの差別があります。むかしから浄土にゆけることすら容易でなく、悪業を重ねた身ですから、下品下生で十分満足だという考へがあります。しかしそれは間違いだといふのです。下品は、五逆十惡の罪人が臨終の時に、はじめて善知識の助けで十声あるいは一声お念仏を唱えた者がゆくところ。中品は小乗の持戒の行者、父母に孝養し、礼儀にかなつた人々のゆくところ。上品は大乗の凡夫、菩提心の行者のゆくところ。ゆくとこゝろです。

「禪宗にもお知り合いが沢山いたのですが、何しろ父が九十五歳までも長生きしましたから、親しくしていた老師がたも、大ていはもう亡くなられてしまいました。霊南坂教会で小崎道雄牧師が司式なされたのは、小崎さんのお父さんの小崎弘道牧師を尋ねて、父の一家が熊本から上京してきて草鞋をぬいだ、という御縁があったからなのです。」

○

葬儀の時、正面には戒名が安置されていた。それは大東亜戦争の終つた日、翁自らが選ばれた戒名である。

昭和二十年八月十五日

百敗院泡沫頑蘇居士

文久三年癸亥正月二十五日生

百戦百敗して泡沫の如く消えていく頑固爺の蘇峰という意味である。終戦の日すでに死んだものと自責したのである。翁は若い頃から国民主義者であった。それが大東亜戦争の理論的指導者としての活動にまで連絡したのだ。翁が終戦の日この戒名を自撰されたのは、この自責と懺悔の表れであろう。しかしそればかりではなく、生死流転の世界を超え

出でて、真如永遠の安養界への解脱を願う、伝統的な仏教徒の願いではなかったろうか。私は、この戒名を矢野家の過去帖へ記入しながら、そんなことを思った。

○

昭和二十三年に静枝夫人が八十二歳で亡くなられた時にも、翁は自分で戒名をつけられた。

平常院静枝妙浄大姉

この時にも、私はこれを過去帖に記入しながら、矢野氏と

「戒名のしきたりからいうと、静枝という名は大姉のすぐ上につけるのだが、そういう作法を超越しているところが、先生らしくて面白い。」

と語ったのだけれど、やはり戒名をつけるということは、ただの習慣でなく、常住にして清浄の世界への野辺送りという翁の願いの表れであったろうか。

「明治時代も、これでとうとう終ったという気がいたします。」と、鶴子夫人はほろりとした。

ところが、念仏が即ち大乘の行であり、浄土に生まれんとねがうのが即ち菩提心であります。本願によって往生できるのであって、本願を信ずるか信じないかが、その境目になるわけです。

そして上人が、次に扉にある通り、上品をねがうのは、わが身のためでなく、衆生救済の大目標があるのだと断言されています。

この法語の次に、更にアミダ経のことに及んでいます。即ち、「アミダ仏の名号を執持して一日七日すれば、往生する事をうとあかせり。衆生これを信ぜざらん事ををそれて、六方にをのをの恒河沙の諸仏ましまして、大千に舌相をのべて証誠し給へり。」そして、このことを善導大師が申されるのに、諸仏がこのように証言しているのに、若し証言に偽りがあったとしたら、諸仏の「のべ給へる舌、ひとたび口よりいでをはりて、ながくくちに還りいらすして、自然に壊爛せん。」と。従ってこれに疑問を持つものは、アミダ仏の本願を疑うことであり、釈尊の所説を疑うことでもあります。また六方恒沙の諸仏の所説を疑うことでもあります。

印度の古いクイズ

——経文にあるお話——

むかし印度に棄老国という国があつて、この国の人々は、誰でも老人になると、遠い野山に捨てられる規則になっていました。

ある孝心の厚い若者が、いくら規則とはいえ、年老いた父を棄てるにしのびず、深く大地に穴を掘って家を作り、そこに父を住まわせて孝養をつくしていました。

あるとき、隣りの大国から難問をかけられこれが答えられなければ、すぐ攻め寄せて国を滅ぼすといってきました。王を始め国中の人は困りはてましたが、孝心の厚い若者がこれを聞いて、ひそかに穴の中の父に教えてもらつては、難問を次々と答えたのでした。

例えば、その難問と解答は次のようなものでありました。

○

「ここに二匹の蛇がいる。この蛇の雌雄を見わける方法は何か」

「それはたやすいことである、軟い敷物の上

に二匹の蛇をおいてみる。そのときさわがしく動くのが雄であつて、動かないのが雌である」

もつとも、二匹ともさわがしく動いて喧嘩にでもなつたら二匹とも雄なのでしょうが。

○

「眠っているものに対しては覚めているといわれ、覚めているものに対しては眠っているといわれるものは誰か」

「それは現に道を修めている人のことである。道を知らない人に対しては覚めた人といわれ道をさとした人に対しては眠っているといわれる」

ご明答、という外はありません。

○

「大きな象の重さはどうして量るか」

「その象を舟にのせ、水ぎわに線をひき、次に象を舟からおろして今度は石をのせ、その線に及んだところで、石の重さを計る」

皆さんご存じのことですが、すでに印度の話にこれがあったことまでご承知でしたか。

○

「一掬いの水が大海の水よりも多いというのは、いかなることか」

「清かな心で一掬いの水をくんで、父母や病人に施すと、その功德はとこしえに消えない。大海の水は多いといつても、ついには尽きるときがあるかも知れない。これをいうのである」

○

精神の問題というところでしょう。

「私はごらんの通り骨と皮ばかりになつてしまった。世の中に、私よりも、もっと飢えに苦しんでいるものがあるであろうか」

「世にもし、けんどん（慳貪）で仏法僧の三宝を信ぜず、父母や師匠に供養をせぬならば、その人の心は、飢えきつてゐるのみでなく、またその報いとして、後の世にはがき（餓鬼）道におち、長い間、飢えに苦しまねばならぬ」

人はパンのみにて生きるものに非ず、世にがき程恐るべきものはありません。

善いくせをつける

なくて七くせ、あれば四十八くせとい
い、いずれも悪いものとなっています。だ
が中には善いくせもあります。

他人のふりみて我がふり直せともいいま
すが、他人の悪いことは目につき易く、善
いことの真似はできないものです。ある人
は、駅でも往来でも、水道から水がもれて
いるのを見ると必ずとめて歩くくせがあり
ます。ある時、どこかの少女が水道の栓を
しめているのをみて、早速真似たわけです
が、僅かでも善いことを自分がしていれ
ば、幾人かはきつとまた真似してくれると
いう信念を持っています。しかしその
内に栓がゆるんでいるのを見かけると、き
つちり水を止めずにはいられないと、その
人は申ししていました。

またある人は、よく旅行をすることを利
用して、「浄土」を読んで、必ず「浄土」
を車中に置いてくるそうです。これは後か
ら座った人が、きつと「浄土」を拾ってく
れるし、必ず目を通してくれると思うから
です。

今では有名な人ですが、若い時分に、橋

の上などに、わざと扇を落として歩いたそ
うです。何気なく扇を拾った人は、きつと
これを開いてみてくれるだろうし、そこ
に自分の画いた模様がかけられているとい
うわけです。

チラシという広告の一種だといえ、こ
の話はそれまでですが、自分の大切なもの
をわざと捨てるところが違います。

くせとはいえないでしょうが、他人の悪
口を絶対にいわない人があります。この人
は、性質が温順であつたばかりでなく、他
人の悪口をいうことの恐ろしさを感じてか
ら、自からを慎んだのだそうです。他人の
くせなり、為すことに対して不快に感じた
り怒ったりすることはあるのですが、ただ
口にしないのです。しかし今では何等の努
力もなしに、悪口をいわないくせができて
しまいました。

こうなると、何かの会合で互に他人の
悪口をいい合っているのを聞くと、そのこ
とに不快極まるものを感じて耳をふさぐそ
うです。

あれは某のくせだよと諦める場合が多い
のですが、誰でもが善いくせをつける努力
をすれば、お互の生活がどんなにか明朗に
なることでしょう。

「ここにま四角なせんだんの板がある。この
板はどちらが根の方であるか」

「水に入れて見れば、根の方が幾分か深く沈
むによって、根の方を知ることができる」

いささかとんち教室のご解答に似ています
が、一つ実験して下さい。

○ 「ここに同じ姿、同じ形の母子の馬がいる。

この母子をどうして見わかるか」

「草を与えると、母の馬は、必ず子の馬の方
へ草を推して与えるから、見わかることがで
きる」

馬の情は人間以上なところがあります。

とにかくこの若者は、かくの如く明確に難
問に答え、国の滅びるのを救いました。まさ
にクイズ合格で賞金を得たところです。

王さまは若者の答えに感謝もし、驚きもし
ましたが、あにはからんやこの答えは年老い
た父親のものであることが判りました。

そこで王さまは、すぐ布令を出し、以後は
棄老の規則を廃止し、年老いた人には孝養を
つくすよう命じました。

哲学の小路をゆく

——法然院を訪ねて——

石 上 善 応



(写真は法然院山門)

うのも重要な特色の一つであろう。最近の京都では、梅尾の高山寺の縁側で、紅葉をめでながら、閑寂のよさを味わった過ぎし日のことが特に思い出されてくる。この閑寂を洛中に求めるならば、何といっても法然院を中心とする一帯から、かもしだす雰囲気そのものであろう。

しづけさの極まるところ現身は

置かむとぞおもふ苔の深きに

京都の

よさ、そ

れにはい

ついろと

めるだろ

うが、京

都らしい

閑寂とい

吉井 勇

初めて法然院を訪れた時、錦林車庫前で電

車を降りた私は疏水沿いにでたものの、はっ

きりと場所を調べて来なかったことに気付い

たが、逍遙に適しているせいか、別に気にも

ならなかった。疏水沿いに歩いている老婆に

聞くと、気さくにしかも丁寧に教えてくれた

が、京都に住んでいる誇りからか、この辺の

すぐれている由来を長々と説明されたのは、

些か閉口であった。だが、老婆の自信に満ち

た郷土愛から京都弁はこころよく耳に響いて

きたことが忘れられない。

「是非、法然院においきやす。法然院は、よ

ろしおす。」と。

その後、私は法然院が忘れられず、再三訪

れているが、その路順は銀閣寺門前から法然

院へ向うのが何となく好きになっている。は

げ落ちた土塀や、家並みが、古風な倣を残し

ている。右手に吉田山、左に東山の山すそが

迫っている。この小路になれた頃、林と石垣

につつまれたお寺のそばに出る。カヤぶきの

小さな山門が杉の木立と調和して、美しい眺

めである。静まりかえった山門の中からは何

一つ音が聞えない。葦辛酒肉山門に入るを許

さずの石碑がきびしく目の中にはいつてく

る。背中をボンとたたかれたような気持ちにな

る。石段をのぼって門内に入ると、盛り砂の

上が平らになって、そこに模様が画かれてい

る。石庭の白砂に見なれたためか、この普通

の砂の盛り山は、また新しい感覚の目を開か

せてくれる。この盛り砂の向うに石畳の小路

を中心として、清冷な池が平凡に治まってい

る。わざとらしさのない庭の構成は、あたりの

静寂さと相俟って、一つの交響曲を示して

くれているようである。

法然院は法然上人の門弟、住蓮が安楽らと共に六時礼讃を修行していた所である。後鳥羽上皇の寵姫、松虫・鈴虫が法然上人に帰依して尼となり、この二僧のもとにかくまわれていたため、住蓮、安楽の二人は重刑に処せられたと伝えられている。その遺跡が法然院と名づけられたが、それは今の安楽寺であるとも言われている。しかし、それはどうあれ、悲劇を知るか知らずか、この池の流れは人の心をゆさぶるような透明さである。

案内を請うて、中に入る。知恩院第三十八世、心阿万無上人の手によって、この地に移された堂宇は、大きな構えを見せてはいないが、実に落ち着いた感じである。観光客の少ないことが、殊の他嬉しく思われる。京都の人々も、京都のよさはソートとしておきたいのである。本堂に案内されて、一隅から内陣を拝む。ここの内陣は何という明るさである。暗い感じが微塵もしないのに、その神々しさはより以上に響いてくる。内陣の板の間は鏡のようにピカピカしていて、明るさが更に反映しているのに気がついた。手入れは大

変だろう。万福寺の系統だという、格天井もちつとも異質的な感じを抱かせない。須弥壇の前の板の間に、白い紙で作った蓮華が二十五、整然と置かれている。これは二十五菩薩の来迎の象徴である。鏡のような板が池水に譬えてもおかしくない。ここにちーっと坐っ



(写真は法然院庭園)

ていると何時の間にか、俗世間のちっぽけな悩みが解消して、気持ちが清らかになっていくのを覚える。偉大な人はこのような

弁阿上人は、西宗要の中で、法然上人の「烏帽子もきぬ法然房なり」を釈された、「只念仏往生を仰いで信ず」と言われ、又「われらは法然上人を信じ奉り、法然上人は善導を信じ奉り、善導は釈迦弥陀を信じ奉り給うなり」と仰せられている。二祖上人でさえ、偉大な人格を通して、自分を見出だしておられる。私のようなものには、余計そういう人を求めないではいられない願いが強い。人と人とが裸になった世界には真実以外のものは残らない。そうありたいと反省を求めている自分に気がついた時、案内の僧が入ってきた。この内陣はさながら生きている一人の僧侶の如き感がする。生きている本堂はそうたくさん見られるものではない。板の間の磨きにも一人々々の真心がこもっているせいである。案内の僧は中庭から座敷の襖絵を説明してくれる。狩野永徳の筆になる襖壁張付絵は、分らないながらも見事なものである。方丈の間は余計奥ゆかしい。

桃山の画ぶすまもあるみ寺ながら

上人の居間は白きからかみ

さぬつどり雉子を描きし唐の画の

あでやかにして寂びにけるかな
この寺の代々のひじりのめでましし

雉子の画掛けて今日は楽しむ

川田 順

後西天皇の皇女誠子内親王の御座所を移したと伝えられているこの建物は簡素であつてしかも美しい。この一室を借りて、我々の集いを設けたら、さぞかしとも思い、また、余り俗世間の風をいれたら悪かろうとも思うが、そういう希望を抱かせる程にここの空気はよい。川田順氏のほめる理由も坐つて見て、初めて納得することができる。吉田山のはじめに真如堂が印象的に目にうつつた。

玄関でお礼を言つて辞すついでに、庭の盛り砂のことを聞いた。枯山水かすいすいを現わしたものだという。以前、小西甚一博士との談話で、枯山水は唐山水かすいすいが正しいものだろうというお話を伺つたことがある。確かに山紫水明の日本では不必要なものであろう。だが、中国の用法を考えることの好きな日本人が、日本化したものに違いない。禪宗の洞山良价が示した五位説などは、そのまま、この枯山水にあてはめて考えても不自然なことはなからう。

特に「静中動」の考えは、誰でもすなおに受け入れることができるだろう。ここの門をくぐつて、まずこの盛り砂を見る。知識欲過剰な我々はポカンと頭をたたかれた気持にされる。途端に緊張して、すなおに本堂へ参拝することができるようになる。見事な調和という言葉が本当に言える。ここのお寺の庭がよいと言われる理由はここにあるようだ。見る人間がすなおな気持になつてゐるからに他ならない。

ふり返りふり返り、去りかたやらない気持をおし切り、寺を辞した。カヤ葺きの門を後にして、左の山手は墓地である。ここには京都の有名なお墓が並んでいる。鎌倉の東慶寺にある文化人のお墓はここをまねしたもののなかであろうか。京都の知識はここに眠つてゐる。石畳の階段の所に平凡な黒い門が立っている。何気ないこの門にも、美的感覚の持主はそのよさを、よく見通している。アメリカの若い建築家、N・F・カーヴァー氏は「日本建築の形と空間」という写真集の中で、石と木を接合した柱としての形の美を取りあげている。その鋭い感覚にはとてもかな

わない。見直してなるほどと感心するだけである。

いよいよここでお寺ともお別れである。それにしても、今迄の快い気持をソートとしておきたいと考える。銀閣寺から法然院を通つて、疏水沿いに南禅寺まで抜ける道を、土地の人は「哲学の小路」と呼んでいる。

それは全くピッタリする。とすると、法然院は京都の哲学の源泉と言えそうである。疏水沿いの道を歩くと、確かに何かを考えなくてはならない不思議である。途中、鈴虫・松虫の塔のある安楽寺の門前に出る。

鶯もなれて啼くなり鐘の声 桃下

桃下は悲劇の二女にほぼ同情したのであろう。京都の歴史は余りにも強い。今、歩いている、この道を昔は誰が、と考えただけでも、数えるにいとまのないことであらう。このせいか、または京都が好きなのか、「哲学の小路」を通りこして、インクラインから平安神宮、三条へと歩くにまかせて考えることの多い私ではある。

信 仰 実 話 (二題)

第一話 医者合掌

今、きこんな話のある道理はありませんが、その時分——さよう六十五年ほど前のこと、無免許で医院を開業し、しかも繁盛していた人があるのです。

もちろん、名儀は立派なお医者さんのを借りていたので、看板は××医院といていたのですが、実際は副院長である塚田さんがやっていたのです。東京とは申せ、下町も場末のことです。

もっとも後になって塚田は臭い飯を喰うことになりましたが、よくまあ長らく開業できたものです。

私の住んでいた町に二軒の医院があつて、他の一軒はほんもののお医者で、私の祖父は二人の医者から治療を受けていました。しか

し飲み友達だったせいもあつてか、祖父は塚田さんの治療を喜んで受けていました。私の子供心にも、いよいよ祖父がいけなくなつて何々博士が立会いの診察に、夜分人力車で来てくれたものですが、いつも塚田さんが側にいたことを憶えています。

○

塚田さんは背は小さくて肥えていて、丸々した顔にはとても立派なひげを具えていたのです。私たちはチャップリンの愛称を奉っていました。チャップリンが来たといつてよく母親に叱られたものでした。私が薬をもらいに医院にゆくと、往来にまで患者がつめかけて待っていたのには驚きました。とに角土地では人気のあつたお医者さん、ではないモグリ

さんでした。

祖父は二年以上も床にいていたので、いよいよ重態になつて、私たちも夜中に起されて、何んのことか判らず一室に座らされていたことがあります。

そんな時必ず塚田さんが忙しそうに注射をしたり、脈をとったりしていました。塚田さんは殆んど私の家にいてくれたようです。奥さんが急患だといつて私の家にむかひに来られた位です。

○

こうした日が幾日か続いて、家人も諦めたようですが、塚田さんは一向に変らず真剣に看病してくれました。さすがのチャップリン氏も私たちから遠い存在のように感じたものです。

そしてやがて祖父は大往生をとげたのですが、その二三日のことは今も忘れません。祖父は平常から観音さまを信仰していました。それで観音さまの軸や像もいくつあつたのですが、塚田さんがこの軸をかけたなり、像を祖父の見易い所に置いてやつたりしていたことを昨日のように思い出します。

塚田さんは観音さまの信者かどうかは知りませんが、とに角信仰の篤い人でした。ある晩のこと例の如く突然起されて祖父の部屋に座らされていたわけですが。部屋に行ってみると塚田さんは祖父と同じように観音さまの方を向いて、熱心に手を合せて拝んでいました。初めて見るチャップリン氏の姿に、私は真剣なものを感じて印象に残っています。

○

祖父がこれほど重態になる以前のこと少しは元気のあった時分、塚田さんとこんな話をしていたのを憶えています。

「あんたの所は繁盛していて結構だが、よく患者を殺さないものだね」

「それは経験さ。それにこれは難しいと思えば他の医者に廻してしまおう」

「治りそうな患者ばかりなら死なないだろうが、それでもよく患者が集るね」

「患者はね、薬で治るよりは自分で治ってくれるのさ」

「……………」

「患者には、自分で治すものと、自分で悪くするものとある。いくら藪医者でも、この医

者にまかせるといふ気でいてくれれば自然に病気はよくなるよ。反対に今の注射は何んの薬だとか、この水薬は何と何かとか気を廻す患者は、たとえ薬がよくても仲々治らない」

「すると、わしの病気は……」

「きつとよくなる。あんたが観音さまを信仰しているが、いくら観音さまでも信仰しない人には救いようがあるまいが。観音さまの利益は信仰するからあるのと違うか」

「観音さまと藪医と一緒にされてたまるか」

「ハハ……」

○

祖父が往生したときは、私は何分子供のことで、これが悲しいことなのかどうか、はっきり判らないことでした。しかし塚田さんが祖父と一緒に観音さまに合掌していた姿は、今もって眼の底に焼きついていきます。祖父が塚田さんに最後まで診てもらったことが、あとに残った私たち家族にまで温い幸福感を与えてくれました。

その後まもなく塚田さんは検挙されました。新聞の片すみに悪質のモグリ医者と報道されている話を聞いた私はほん気にできない

不思議さを感じました。

塚田さんには、大勢の子供がいました。が、長男だったか次男だったか、今では博士号をとって外科医として信用を得ています。はたしてその人は、親である塚田さんがモグリとして検挙されたことを何んと思っているのでしょうか。医者として恥すべきこととして親を憎んでいるのでしょうか。

○

医は仁術というのは古い言葉であって。現代の医学は総合的科学として存在しているのだそうです。しかしかにかに昔のこととはいえ、塚田さんが沢山の患者に囲まれ、患者にしたわれていた事実は、今でも医者として立派なものといってよいのでないでしょうか。少なくとも私にとっては、塚田さんが死に瀕した祖父と一緒に合掌して動かなかった、あのうしろ姿は忘れることができません。そして時折は自然に思い出され、私の一生に大きな影響を与えてきたものです。お医者さんには笑われるかも知れませんが、私は医者の方の掌の姿こそ、医術の蘊奥であるという信念を持っています。

(編集部)

第二話

禍を呼ぶ女

房枝はたしかに高度のヒステリーであつたとは、さすがのお神さん連中でも一致した意見であつた。消防のおかげで類焼こそ免かれたとはいえ大なり小なりいずれも被害を受けたお神さん達としては、房枝をヒステリーとして片附ずけた点からみれば、たしかに同情すべき一面を認めていたからに外ならない。男なら酔ばらつていたおかげで殺人すら無罪になつたと聞いている世の中である。自分の家に火を放つたことは、もちろん無罪ではなからうが、そこは女は女同士、近所づきあいもあつて同情した様子であつた。

○

もともと房枝は悪い人間でないというのが親しく附合つていた者の評判でもあつた。誰だって悪い時には悪いものさ、という一種の処世観から近所ではさ程の酷評もなしにすんだのであつた。ただ房枝という名から連想さ

れるおもかげがなく、やせぎすな貧相なところが、誰にも賞められない欠点であつた。

房枝にしても、一時は羽ぶりのよかつたこともあつた。戦争中は皮類といえは貴いものであつた。それをしこたま隠し持っていた皮革商が、うまく売りさばいて一財産作つたことには及ばないにしても、房枝の夫の幸作は、その下請ということ、たしかに余裕のある生活を楽しんだ時代もあつた。好いことが続くことをトントン拍子というけれど、これは階段を跳びあがることを形容したものだろう。同じ階段をさかさに落ちるとなると速度も速い。普通に落ちるなら途中でくい止める工夫もあろうものを、雪だるまが坂を落ちるとなるとますます大きくいよいよ勢ずいて止まるところを知らない。それが悪い方に落ちるのだから惨めなものである。

○

幸作は同じ職人仲間からさそわれた競輪が病みつきで、ご多分にもれず蓄えた金をすつてしまふのに長いことはかからなかつた。競輪に凝るだけなら世間にもある話だが、敗けてばかりいると今度は酒に女にうさを晴らすことになり、彼の生活も底をついてしまった。一つつまずくと不思議に次から次と悪いことが続くものである。彼の場合は、悪いことが続いたというよりは、世間が落付いて甘い汁が少なくなつてきただけである。房枝にしてみれば、一時は近所を妬まただけに、お神さん連中の白い眼がある。夫が家から品物を持ち出し、止めれば乱暴までされる苦しみと、近所の白眼の中に入つて全く途方に暮れたのも無理のないことであつた。

さてこうなると教養とてあるわけのない女だけに、幼い子供を二人もかかえて独り苦勞させられ、訴えるところもない泥沼にはまり込んでヒステリーになるのも当然だろう。苦しい時の神だのみ、捨てる神あれば何んとやら、いつの間にか某新興宗教の熱心な信者になつていた。

溺れるものはわからでもつかむ。苦しい時に

は何んでも頼りたいのは自然の姿である。房枝はほんとにその宗教を信じた。昔のことは夢と諦めても、デンと居据った手強い貧乏神を追い払うだけでも、その宗教なしにはいられない切な気持であつた。

ところが、その宗教は彼女一人が信者になつただけでは御利益が少ないのである。つまり幾人かの同信者を募り、教勢を拡めることが責任であり、この責任を果さないと救われないという。房枝は熱心に近所のお神さんを説いて廻つた。説いて廻れば、お神さんは結構なことですと返事をしてくれる。返事はよいのだが、いざ会費となると一向に納めてくれない。もつとも、それは年末のことで、見る目も忙しそうな時なので、たつてとはいへなかつた。ところが正月も松がとれたが、お神さん達の態度は少しも変らない。

○
よく注意をしてみると、近所の家で仏壇はもとより、お位はいを焼いたとか捨てたとかいう家が一軒もありはしなかつた。これでは折角信仰を口では同調していても信者になつた証にはならない。房枝は更に輪をかけ

て説いて廻つた。暇さえあれば、近所の家に出掛けて行つて膝ずめ談判をした。個々に説得する骨折りをいやがるわけではないが、信仰座談会を開くことも要求されていたので、正月も松がとれた頃に一夕集つてくれるように頼み込んだ、いつもより特に辞を低くして、常から親しくしている家を選んで頼んで廻つた。

○
約束の日には、荒小屋ながらも掃除をして待つていた。評判のよくない幸作には、いつになく映画をみるよう六区に追いやつておいた。時計の進みにいらいらしていたのに、予定の時刻がきても誰も来てくれない。時間が過ぎて足音一つしない。房枝は近所の人たちを憎んだ。あれだけ約束したのに、一人も来ない。今時分はお茶でも飲んで、寝床に子供をねかしつけているお神さんの顔かたちまで、房枝の脳裡に浮ぶのであつた。炭をつぎつぎ、冷え込む寒中を自分独り待たされて、近所の人たちは温い床にもぐつてゐるかと思ふと、それだけでも一軒一軒となり込んでやりたい氣持になつた。

幸作がだまつて帰つて玄関をあがつてくるなり、彼の呑氣そうな顔にかんしやくが破裂して、焼ちやうを飲んだな、この呑んだくれと武者ぶりついて行つたのには、幸作も驚いたが、やつと寝ついた子供たちがびっくり目を覚ました位であつた。

○
こんなことがあつて房枝は考えた。あれだけ一心に頼んでみてもお神さん達は集つてくれないとすれば、これから同じことである。教師さんがいつもいうように、皆が信者にならないなら必ず禍がくるに相異なる。どんな禍がくるかおどかさ必要がある。

そこで、改めてお神さん一人一人を廻つて歩いた。皆さんがこの宗教の信者になることは、何も房枝個人のためではないのだ。皆さんのためというより房枝も含めてわれわれのために、われわれに禍が来ないために、そして病氣が治り、金がもうかるために、是非一晩集つてもらいた。同じことを根気よく一人一人に説いて廻つた。おたくのお子供さんは成績が上ります。おたくの年老りは病氣が治ります。おたくは……と自分ながら後になつ

て感心する位に相手に応じた説法を行った。これなら大丈夫と半ばは自分の弁舌にほれこんで当夜も待っていたが、結局のところ一人も集ってくれなかった。

房枝はほんとに怒ってしまった。いくら夫に苦しめられ、貧乏したからといっても自分のことではない。皆近所の人たちのためなのだ。それなのに集ってこない。これは単に房枝の好意を無にしたとかいう程度の問題で済まされない。実に神を無視し、冒瀆するものである。必ずや神はこれらの人々に禍をもたらすに違いない。一層のこと早く禍が来た方がよいかも知れない。禍に見舞われれば、驚いて信仰するのであろうし、自分の所に集ってくるであろう。房枝は憤がいすればすれ程、自分の考えに自信を持ってきた。

○
しかし房枝の見落していた重大なことがあった。それはお神さん連中にいわせれば、房枝さんがそんなに熱心なら、先ず第一に幸作の競輪と酒と女と貧乏と、その一つでもよいから取り去るのがよいではないかということであった。

物ごとには三度目の正直ということがある。房枝は今度こそ人々を集めてやろう。若しこれでも集まらなければ、取り返しをつかぬ禍のあることを教えてやろうと決心した。そこで今度こそは集ってくれないと大変だからとふれて廻った。やがてその日の夜がきた。房枝は緊張して待っていた。幸作は昼間からただならぬ空気を察してか、夕方コソコソ出掛けてしまった。八つになった長男は、子供ながらも普段と違うものがあつたのか、友達のところから帰ってこなかった。

○
房枝は今夜こそ何か禍が起ると信じていた。人が集まることより禍の起るのを期待していたといった方がよいようであつた。しかし時間は刻々過ぎて行つた。あれだけ口をつくして説いたのに矢張り一人も集ってこなかった。それよりも禍の方も来なかった。こんな筈はないのである。これは何かの間違いなのである。若し禍が来ないなら……いや決して禍は来る。房枝は自問自答して、ますます自信を強めて行つた。

台所の方でコトという音がした。房枝はフ

ラフラと起ち上って破れ障子をあけて電燈をつけてみた。もとより猫一匹いなかった。その時房枝は、石油コンロの石油の入った一升びんが目にとまり強く氣をとめた。房枝はこれだと思った。一升びんを取り上げるや座敷にもどつて、戸棚をあけて夢中でふりまいた。新聞紙をまるめるとマッチで火をつけた。更に新聞紙を次々に投げ込んだ。

火鉢の前に座り直して玄関の方をにらめるように、今に禍がくるぞと口の中で叫んでみた。まるで禍が押しよせるように、背後の押入れからは、もうもうと黒煙が吹きだしてきた。まるで房枝が「今に禍がくるぞ」と口の中で叫んでいたのを裏ずけるように不気味なものであつた。

黒煙が増すに従つて、房枝も座ってはいられなかった。押入れの方をふり返つて、何か短く叫ぶと、夢中でねていた末ッ子を抱きかかえて外にとび出した。外に出てからの房枝は、どこをどう走つたのか、とにかく振り乱した姿のまま家に戻ってきた時には、家の囲りに黒山の人が集つて、玄関のわきには、巡査と刑事が立っていた。

(編集部)



万人に眞実を

— 無量寿經講話(二) —

佐藤 密雄

よく人が、仏教は理くつが多いといひます。キリスト教やイスラム教では、神さまというものは、何も説明しなくても、すでに実在しているということから話が始まるわけです。前回において簡単ながら法蔵菩薩がどのようにしてアミダ仏となられたか、また浄土がどのようにに設計され、かつ完成されたかを申し上げました。そして誰もが、なるほどと思うように詳しく説明されているわけでありまして、さて、前回に続いて、

アミダ仏とその浄土はいま、十方の世界で、その威神功德の極まりなきことが、諸仏によって称讃されつつあります。そして十方世界でアミダ仏を称讃されるのを聞いた諸菩薩は、東方より、西方より、南北四維上下の世界から、西方浄土に集りきて、現実にアミダ仏の導きを受けて、自身の仏道を確めようとします。

浄土にきた諸菩薩は、アミダ仏と浄土の大衆に敬意を表し、アミダ仏の説法をきくために、仏を歌歎するのです。

神道と懃とを究達して、

深法門に遊入す。

功德を具足して、

妙智は等倫なるはなし。

懃日は世間を照して、

生死の雲を消除したもう。

となして、さらに菩薩たちは誓うのです。「彼の嚴浄の土を見るに、微妙にして思議し難し。因りて無上心を発す。願くは、我が国も亦た然らん」

アミダ仏は、これらの諸菩薩の称讃と誓願とを受けた後に、八種の妙音をひびかせて、諸菩薩の志す誓願が必ず成立することを予言して、いよいよ菩薩行に不退になるよう

に確信と勇氣を与えられるのです。

○

このようにしてアミダ仏と浄土とは、十方世界を浄土化する中心となり、菩薩たちの菩薩たることの故郷となっているのです。

また浄土へ、必ずしも死をまたず、何人も何時でも、行き得るし、また現実にアミダ仏に見えることができるのです。そしてアミダ仏に一度見えた凡夫は菩薩力を得て十方の諸菩薩と同じように十方の世界に活動できます。

しかしこのことについて、釈尊は誠めを与えておいでになります。即ちアミダ仏以外の菩薩や凡夫は、このことを「知り難い」ので、アミダ仏の仏力を信ずる外はないのです。

釈尊は

寿命ははなはだ得難く

仏世またあい難い

人は信慧あること難きも

若し聞かば信ぜよ

といわれています。しかしおごりたかぶっているもの、

怠け心のあるものは「信じ難い」とせられています。とに

角、人は信ぜねばならぬのです。

以上述べてきたことで、無量寿經の上巻は終わっています。そして下巻には凡そ四つのことが記されています。それは、

一、アミダ仏の浄土の功徳を一般大衆が現世においていかにして蒙るか、また浄土へ往生するにはいかにすべきか。

二、アミダ仏と観音勢至二菩薩に対して十方諸仏諸菩薩の称讃とその功徳のこと。

三、人間生活の容易に宗教に入り難い五種の惡の現状と廢惡修善に進むべきこと。

四、アミダ仏の浄土の教えは修行し難いというようなものではないが、人間的な考え方では容易に信じ難いものであること、然し難信を克服して信じてこそ、現在にも未来にも浄土の至樂が与えられること。

の四つであります。

アミダ仏の慈悲の光は十方世界をくまなく照されるのですから、現世に深い信心をささげて、アミダ仏を念ずれば、その現世で仏道から不退の地位に到達できるということです。清純の信心は仲々に得がたいが、しかし心さえ素直ならば得られないものではありません。

○

しかし現世にまみえただけでも大きな功德のある「アミダ仏の御もとで」直接に仏の指教を受けたいというのが誰も望みます。この浄土に往生する方法には、第一が念仏往生であります。

全国いたるところで聞かれる念仏の声は、念仏の功德で来世に浄土を願っているもので、これが念仏往生です。ここに有名な句があります。

あらゆる衆生、その（アミダ仏の）名号をきき、信心歡喜して、乃至一念、彼の国に生ぜんと願はば、即ち往生を得て不退転に住せむ。ただ五逆と正法を誹謗するをを除く。

ただ一回でも心をこめて浄土に生じたいとアミダ仏を念ずれば浄土に生ずることができるということです。そして別に「死して後に」とは断っていません。ですから今世に觀念の浄土に觀念の上で生きることにも包含してのものとするべきであって、これは現世と来世との念仏往生だと考えられます。

觀無量壽經には、五逆十惡をなす極惡のものでも、命終る直前に善友の話をきいて善心に立戻ったが、もはや死が差迫って、アミダ仏を念ずるいとまもなく、ただ「無量壽仏」と発聲せよといわれ、十声しただけで死んだとして

も即時に西方浄土に往生するとあります。これをみても、「五逆と誹謗正法を除く」ということは、これらの惡を「止めよ」といわれた、仏のいましめと考えてよいのです。

また乃至一念ということの意味は、念仏の効果は一念でも十念でもよいのであるが、往生人の信心はできる限り多くなすべきで、乃至は意味を強めた表現というべく、多ければ多い程よろしい意味に外ありません。

なお、念仏する時の心構えは、「心をこめてアミダ仏を信じて、西方浄土に生れようと志向して名号を念ぜよ」となっています。

この「名号を念ずる」の念ずるということには解釈の仕方に三つあります。第一は仏を心に觀念したり思念したりすることであるのか、第二に名号を口に称することであるのか、第三に心に思念してその思いを口に出して名号を称するのであるのか。このことは善導大師の判定に従って、念は称の意味で、仏の名号を口に称えることだとするのが正しいのです。これを念称は一の解釈といえます。

○

仏に迎えられて浄土に往生するのに、三つの區別があります。第一には、(1)家を捨て欲を棄てて沙門となって、(2)菩提心をおこして、(3)一向に専らアミダ仏を念じ、(4)諸功

徳を修して彼の国に生ぜんと願うという四つの条件を具えたものです。第二には、(1)行じて沙門となり、(2)まさに無上菩提心をおこして、(3)大いに功德を修することあたわずとも、(4)一向に専らアミダ仏を念ずべし、とあるので、第一との相異は、「大いに功德を修す能わず」とある点が劣っています。同じ第二のうちにも、次の場合があります。即ち(1)斉戒を奉持し、(2)塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、散華焼香し、(3)これを以て回向して彼の国に生ぜんと願うのであって、これは沙門とならない場合、つまり普通の社会人の場合に相当します。

次に第三には、「たとい諸の功德を作すことあたわずとも当に無上菩提心を発して、一向に意を専らにして乃至十念、無量寿仏を念じてその国に生ずることを願うべし」というのと、いま一つは、「若し深法をききて、歓喜信樂して疑惑を生ぜず、乃至一念、かの仏を念じて、至誠心を以て、その国に生ぜんと願わば」という人の場合があります。

以上の三つの場合を上輩、中輩、下輩といっています。上輩の人は、今世に命終る時にアミダ仏が自身で大眾とともに來現され、その仏に従って、即時に、浄土の七宝華に自然に化生するとせられるのです。化生とは、現世の肉体がそのまま浄土に送られるのではなく、精神的な原因だけで

完全な新生存を發生することをいうのです。中輩の人は、臨終のときに、「無量寿仏がその身を化現したまい、光明相好つぶさに真仏の如く、諸の大眾とともにその人の前に現じたまわん」というのです。下輩の人は、その臨終の時に、「夢の如くに彼の仏を見たてまつりてまた往生を得む。」とあります。臨終の頃まで愚人の惡に暮れたものでも、最後の一念よくアミダ仏を念じ、夢現の如くとはいえ法悦に歡喜した刹那、光輝さん然たる浄土の生活が開けるとすれば、仏の慈悲はまことに大慈悲と申さねばなりません。

○

次に、話をかえてみましょう。第一にとりあげなければならないのは、極樂のことです。

西方浄土のことを極樂といいます。また樂有ともいいます。無量寿經に説かれたのを拝見して、第一に感ずることは莊嚴です。つまり、七宝合成の宮殿樓閣や金銀を布地した池流や、その他珍宝の輝く羅網をたなびかせた宝樹などの美しさであります。しかし浄土は歡樂や榮耀の場所ではなく、聖なる悟りへの清浄の道場であります。

極樂は、人間的には華麗善美であります。人間の欲望のけがれからかけ離れて清浄であることの象徴であると考えねばならぬものです。それは古代印度の人々は、このよう

な人間力をはなれた美しさと精神上の清浄さを表現しようと努め、仏教經典もまた、このようにしているからです。故に極樂には金銀七宝等でみちみちていても、それは善美や富貴をつくしてある意味ではありません。

さて次に、極樂の樂の意味を考えてみると二つの異った立場、全く意味の違った二つのものがあります。

釈尊の教えられた四諦の教理は生老病死等の人生苦の滅を求めるもので、この教理をまもり実践した弟子達（声聞といひます）は、人生苦の滅を至福至樂としてきました。

つまりこの人々は修行によって苦の滅した状態に入ることが樂であつたのです。ところがこれに対して自分のことばかりでなく、自分を含めた大衆の人生苦を滅することに苦心努力することが、真の仏道であり、至上の樂であると考ええる人々（大乘）がでてきました。ですから樂の意味は快樂の意味とは全然違ったものとなつてしまいました。即ち、法樂となつたのです。法は眞實の意味ですが、万人に眞實を与える喜び、自分も人も眞の仏道に生きるのが樂であることになりました。

万人の苦をなくするのですから、限りなき努力の連続で、勞苦そのものともいえるもの、すなわち努力する喜びともいえる樂です。極樂はこのような働きを充分にさせる

に最も都合よくできた所です。そしてこのような限りなき働きの事業が満足に行できる条件の具つたという意味で、樂有莊嚴であり、極樂莊嚴というのです。

小乗派の、人生苦の滅を樂とする考えについて見ますと、四諦の教理が根本になつています。四諦の教説で重要なのは人生苦です。人生苦は四苦八苦です。四苦とは生老病死のことです。外に憎会（いやなこと）に会う、愛別（好しいことに別れる）。求不得（求めるものは得られない）の三苦があり、更にまた総合して人生が苦であると見るのを加えれば、八苦となります。

「浄土」購読規定

一部定価 金四十円

（送料四円）

会費 金 四八〇円

（送料不要）

浄土 二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十三年一月廿五日

印刷 昭和三十三年二月一日 発行

〔定価四十円〕

編集人 竹中 信 常

発行人 佐藤 密 雄

印刷人 大橋 貞 雄

印刷所 共同印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二二八七番

若い世代の人々のために!!

大正大学教授

竹中信常著

宗教心理の研究

A 五判五九〇頁
定価一二〇〇円 十実費

宗教が現代人の心理にどのような受けとられていくかという
ことを、古来の学説史に即して説明すると共に、信仰の心理
靈感の心理、宗感心等とテーマとしてとり上げている。宗教を
理解し、信仰を他に伝へんとする者にとって必読の書である。

東京都中央区京橋二の一（塩山ビル）

発行所

青山書院

振替東京 九九三〇三番

東京都品川区上大崎一丁目七八二

取扱

法然上人鑽仰会

振替東京 八二一八七番

幼児教育に専心する方々へ!!

指導 外語教授 増谷文雄
監修 東大、大正講師

画 中村ひろし

法然さま

B 五判一〇四頁
定価一三〇円 十実費
（十部以上二〇〇円）

浄土門主

岸信宏 貌下

大正大学長

椎尾弁匡 大僧正

増上寺法主

香月善裕 師

知恩院執事長

渡辺真海 師

浄土宗務長

この本は絵ときをもつて、わが宗祖、法然上人の御生涯と御
教旨を、少年少女に、わかりやすく、かつ親しみやすく描き
出したものであります。しかも、その内容は、国宝「勅修御
伝」によったものであります。

値段改正中 材料値上りの為お値段は下記の一・二割高です

鎖ブランコ 2人乗	¥ 13,000
鎖ブランコ 3人乗	¥ 15,000
鎖ブランコ 4人乗	¥ 22,000
鎖ブランコ 6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ 4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム 中型	¥ 28,000
単式滑台 中型	¥ 23,000
複式滑台 中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達実費（都内横浜 500 円以内
其他1000円以内）組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、（荷造費当社・送料着払）

組立説明書送付



篠沢鉄工所

東京都大田区堤方町718
電(75)1024(池上駅東3分)

幼稚園 運動遊具

全国幼稚園・保育園・小学校・各団体に、良品を廉価にのモ
ットーで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
笠・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。